

元天才バンドマンとガールズバンドの少女達

雷王

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて、国内有数の音楽大学で名を挙げ、世界中を魅了した6人組のバンドがあった。しかし、そのバンドは突如解散してしまう。そして約半年後、そのバンドのメンバーの一人であった天ノ宮 響（あまのみや ひびき）に一本の電話が掛かった。相手は自分の祖母で、自分のバイト先を紹介してくれるという内容だった。澁々その話しに乗り、ライブハウス「CIRCLE」へやって来た彼はそこでPip pin' Partyをはじめとするガールズバンドの人達と出会い、彼の失われた音楽の人生は再び動き出す。

かつて100年に1人の天才と謳われた音楽青年がガールズバンドの少女達と送る、多分笑いあり涙ありのミラクルバンドストーリー！

目次

プロローグ	～ 始まりの電話	1
第1章	P i p p i n , P a r t y 編	
第1話	～ 再会	8
第2話	～ 期待の超新星	16

プロローグ　　〈始まりの電話〉

ワアアア——!!!

歓声、喝采、絶賛の嵐。

約数万人の観客の声が最後の歌を歌い終わったのと同時に会場全てに響き渡った。俺は息を切らしながら仲間達の顔を見る。全員同じように息を切らしていたが、その顔は晴れやかな満足顔を浮かべていた。

ここはイギリスの中にある世界でも有数のライブステージ。俺たちは結成してもう今年で4年目のミュージックバンドだ。当初はただ無名のバンドだったが、あちこちでライブをやっているうちにファンの人数は徐々に増え、遂にはファンの国籍や活動範囲が国境を超える程にまで成長した。今では音楽に関わった者にその名を知らない者はいなかった。そして俺たち自身も今の自分達にこの上なく満たされた物を感じていた。

——こいつらとなら、俺たちならどこにだって行ける、なんだってやれる。あの時の俺はそう信じて疑わなかった。

今会場ではアンコールの嵐に包まれていた。俺たちは笑ってもう一度顔を見合せ頷き合い、それに応えるために再びそれぞれの楽器を握りしめ……

♪~~~~~

にやっていた「ある活動」のお陰で今は金に困ってはいない。だがそれがいつまで保つかはわからない。まだ余裕があるうちに何とか安定した収入を得る為に社会の目に触れられる事も無く、それが駄目ならせめて気心の知れた人だけがいるところで仕事が出来たらと思っているが、流石にそんな都合の良い所なんてある訳が無いとほぼ諦めている。

だから俺は決してニートではない。厳密に表現するならば「就職浪人」だ！

「……まあ、言い方が変わったただけなのだが。」

そんなくだらない事を考えているうちに俺は顔を洗って歯を磨き、朝食の支度をした。せめて本物ニートの様な生活状態にはならないようにと、生活習慣は徹底するように心掛けている。今日の朝食の献立は、白ご飯、みそ汁、鮭の塩焼きに玉子焼きなどといった、いかにも日本人らしい和風の朝食となった。隠し味や色んな手間をかけることで45分程時間を要したが、別に今日も1日やる事もないし、することがない分、こうやってやる事に時間をかけて暇をつぶさないとないと俺がやっていけない。

そんなこんなで作った料理をテーブルに並べて俺も椅子に腰かける。変な夢を見たせいで俺も非常に腹が減っていた。早く食べたいという欲求をどうにか抑え、俺は両手を合わせた。そして礼儀正しく、

「いただきます〜」

「~~~~~♪」

「……………」

突如テーブルに置いていたスマホからアラームと振動が鳴った。しかもこれは着信アラームだ。俺は唸りながらスマホを手取る。自慢じゃないが俺は知り合いが多くない。ましてや現時点でこうやって電話をかけてくる相手を俺は一人しか知らない。画面を見ると予想通りの3文字の英字が記されてあった。

「BBA」と……………」

「なんだよ」

通話の方にスライドした俺はスマホを耳に当て、イライラした口調で話した。

「いきなり祖母に向かってその言葉はないだろう。全く……」

電話の相手は俺の祖母だ。両親の都合で小さい頃からおれの面倒を代わりに見ていてくれた人だ。昔はそれなりに仲は良かったが、色々な出来事もあって、今はすれ違ってばかりだ。大学に入学してからは一度も顔を見せていない。時々こうやって電話してきて来るが、今の俺にとっては鬱陶しい事この上なかった。

「せっかく朝飯を邪魔されたんだ。それに俺の事はほつといってくれてあれ程言っただろ」

「そうにもいかないよ。あんたまだ仕事見つけてないんだろう？」

祖母的な射た言葉に俺は思わず「ぐっ」と声を漏らした。そしてその声は勿論祖母の野郎の耳にも届いており……

「その様子だと凶星のようだね」

と短いため息をつきながら言われた。それがまた俺の事を嘲笑うかの様にも聞こえてくる。

「うるせえな、働きたくても働けないっつてんだろ。嫌味を言いに来ただけならもう切るぞ」

「私が良い仕事場を紹介してやる、と言ってもかい？」

「……!?!」

スマホを耳から離そうとする手が祖母のその一言でピタリと止まった。

「私の知り合いが経営している所でね、従業員も多くないからあんたもやりやすいだろうと思ってるね。でもあんたも事情が事情だから強制はしないよ。これに乗るか反るかはおんたが決めな」

「……」

俺は暫く考え込んだ。聞く限り悪い話ではない。だが確かに祖母の言う通り俺にとっては良い仕事場ではないかも知れない。ここで即決するのは早計だろう。まずは、その仕事場がどんな所か聞いてみ

て、しかる後、そこが本当に俺がやりやすい所なのか直接行って、確かめてからでも遅くはない。

「……詳しく話を聞こうか？」

電話を切った頃には朝食が冷めていた。

——翌日

「ここか……」

○o o g l e m a pが目的地に着いたことを知らせると、俺は目の前にある施設に目を向けた。ぱっと見、完成してそれほど月日は経ってないだろう。入口の上の壁には“L I V E H O U S E C I R C L E”という文字が大きく書かれてあった。右側には、木製の机や椅子が並べてあり、その奥にはテントを張ったカウンターの様な物があった。ここはさしずめカフェテリアと言ったところか。俺は今一度その施設を見渡した後、中に入るべく、入り口の扉の前に立った。

——昨日

俺は祖母が薦めるバイト先について詳しい話を聞いていた。

「そこはさつきも言ったように私の知り合いが経営している所でね、
“CIRCLE”っていうライブハウスなんだけど」

「おいちよつと待て」

俺は祖母の話が終わる前に言葉を遮った。

「今“ライブハウス”つつたか？」

「ああ、確かに“ライブハウス”って言ったよ。だからどうしたって
言うんだい？」

「どうしたじゃねえよ！そんな所で働いていたら、3日で俺の身元が
バレちまうだろうが！」

「ライブハウスと言っても、利用客の殆どが女子高生だからね、あんな
の事を知っている人も殆どいないはずさ。」

「女子高生？」

「あんたはずつと家に引きこもっていたから知らないだろうけどね、
今音楽界の間じゃあ“ガールズバンド”っていうのが流行っていて
ね。まあ、きっかけを作ったのは前に私が経営していたライブハウス
だけどね……」

どこか物懐かしそうに語る祖母をよそに、俺は電話越しに「ふん」と
鼻を鳴らしていた。それは祖母に対してではなく、今の音楽界に対し
てだ。女子高生がバンドの真似事をしていること、そしてそれが流行
していることに対してだ。至極気に入らないし、下らない。今の世間
はそんなごっこ遊びの音楽で盛り上がるようになるまでに墜ちてし
まったのか……

「あんた今、女子高生のバンドなんて下らないって思っただろう？」

祖母は時々、俺の考えていることを見透かしてくる。俺は祖母の言
葉に対して、

「だから何だよ。下らない物に下らないと思う事は別に罪じゃ無いだ
ろ」

と聞き直る。

「そう思うのなら一度聞いて見るといいさ。今から住所伝えるからメモの用意をしな」

「お、おい。まだ俺は行くとは言っていないぞ。それに聞いて見るといいって、あんた俺がそういう事に一際敏感なのは知っているだろ？」

「だから聞いて見ろと言ってるんだよ。ガールズバンドはあんたが思った通りの下らないごっこ遊びなのかどうかをあんたのその“耳”で確かめて見な」

「……………」

俺は祖母との会話である違和感を感じた。

何故この人はここまでしてそのライブハウスに行かせようとするのか。遂には女子高生の音楽を聞いてみると促して来るのだろうか。

祖母は時々、俺の考えの及ばないようなことを——良くも悪くも——企んでいたりする。今回の事も恐らく何らかの考えがあつての事だろう。聞く限り悪い話しても無かつたし、それに俺は元より祖母には頭が上がらないのだから、逆らえないのならいつそ、乗つかれる所まで乗つかつてやろう、と半ば自暴自棄な結論に至り、

「分かつた、行くよ。そのライブハウスに」

祖母の話しに乗ることにした。

「ああ分かつた。向こうには話しは付けておくから、あんたは明日、今から伝える住所に向かいな」

俺は祖母の言った住所をメモし電話を切つた。その時のスマホの画面は“BBA”の下には“都築 詩船”と記されてあつた。

そして俺は、ライブハウスに行くと言つた時から祖母がずっと笑んでいたことに最後まで気付かなかつた。

第1章 Pippin, Party編

第1話 〽再会〽

「暑い……」

無理もない。今は8月、夏真っ盛りだ。気温は既に40度近くという猛暑日だ。

「ふざけんなよ地球温暖化……」

自分勝手にこの限りある自然に排気ガスや二酸化炭素といった温室効果ガスを撒き散らして、地球の気温を上昇させて人々を暑さで苦しめる人類は然るべき罰を受けるべきだ。

……いや、受けてるな。現在進行形で

と、そんな愚痴を溢しながら、俺はOoOgle mapの指示に従い、先に進んだ。

帰りにコンビニでアイスでも買おうと思いつながら。

何故俺がこんな暑い思いをしてまで外にいるのかというと、俺は昨日、祖母に薦めによってCIRCLEというライブハウスに——半ば強制で——バイトすることになり、今日はその下見……挨拶参りだ。

そのための俺の今日のコスチュームは、白い靴紐の青いスニーカー、半袖の白いワイシャツに、黒いベルトで締めた青いジーンズ——

―ちなみにワイシャツの裾は出している――。そして赤、濃いめと薄めのピンク、黒の色が斜め縞模様しまもようになったネクタイを少し緩めに締めているという出で立ちだ。俺はバイトの面接などといった事はしたことはないが、とりあえず不快感を買うような服装ではないはずだ。あと、黒色の腕時計に、変装として気休めに、黒淵くろぶちのだて眼鏡を掛けている。

開店時間に合わせて自宅から――この辺りの土地に慣れるためにということもあつて――徒歩で約30分ぐらいで目的地に到着した。ついでに次からはバイクで通勤する事に決めた。まあ本気でここで働くことになったらの話しだが。

そして現フロローグ中盤在に至る。

俺はCIRCLE入り口の前に立ち、その自動ドアに向かって歩み始めた。数歩前で扉は自動で左右に開き、俺を中に誘う。その時、ふと足取りが不思議と重たく感じた。まるで、俺自身がこの中に入ることを拒んでいるかのようだった。しかし、どうしてその思ふか解らなかつた俺は、その考えを振り払い、思いきって足を動かし、CIRCLEに入店した。

自動ドアを潜り抜けライブハウスの中に入った俺はまず店内を見渡した。

クーラーが効いてるのか結構涼しい。内装も外装と相まってまだ新しい。目の前にはテーブルが2つほど置かれてあり、左側は窓になっていて、色んなバンドの事に関するポスターが貼つてある。右側には地下に通じる階段があり、十中八九ライブステージがあるのだらう。

そして目の前のテーブルの奥にはカウンターがあり……

「こんにちは！LIVEHOUSE CIRCLEへようこそ！」

と、言ってくる店員らしき女性がいた。

見たところ歳は多分俺とそう離れていないだろうが背丈は俺より低く、シヨートの黒髪で服装は俺と同じ青ジーンパンに青と白の横縞のシャツに黒い上着を羽織っている。

俺は奥のカウンターに進み、彼女の前に立った。彼女は自然に出てくる物なのか、仕込まれた物なのか分からない営業スマイルで、

「ここは初めての方ですか？でしたらこのライブハウスのご説明を……」

と、勝手に話を進めそうな雰囲気になったので、

「あ、いや、俺は今日からここに働くように言われた……」

と言つて、話を遮った。彼女は「えっ？」と言つて一瞬目を見開くも、話しを飲み込んだかのように両手を合わせた。

「ああ！あなたでしたか！オーナーから聞いています。では自己紹介をさせていただきます。私はこのLIVEHOUSE CIRCLEのスタッフの……あれ？えっ!？」

彼女はいきなり覗きこむように、俺の顔をまじまじと見てきた。なんだこいつ、初対面相手に失礼じゃないか？

俺が不快な表情を浮かべているのを余所に、彼女は尚、俺の顔を見つめてくる。俺もとうとう苛立ちを押しえきれず、

「あの、俺の顔に何かついてますか？」

すると彼女はハツとして俺の顔を覗くのを止めて少し後ずさる。やっと自分の失礼な行為を自覚したかと思つたら……

「……………ねえ、君もしかして……………響くん？」

まさかの、3日どころか入って1日もせずに正体がバレてしまった。

「えっと……………どうして俺の名前がそうだと？」

俺はとりあえず平静を装って質問をする。もしかしたら、この人の言っている響は俺ではない全く別の人も知れないし、まだ確信が持てていないならワンチャン偽名を名乗って誤魔化せるかも知れない。

……………あれ？偽名って使ったら捕まるっけ？

まあ今は俺の質問に彼女がどう答えるかが先決だ。返答とその後
の行動次第では俺も然るべき行動を逃走を凶らせてとらせてもらうが……………

「えっ、覚えてないの!?私だよ私!大学の時、あなたからギターの手解
きを受けた……………」

なんと彼女は俺同じ大学の人で、しかも俺は彼女にギターを教えて
いたことがあるときた。

……………ああ、そういえばいたな、俺達が大学でバンド活動していた
時に、同じく大学でバンドを組んでいた5人組の女子大生がもっと演
奏が上手くなりたいから教えて欲しいって迫ってきて、仕方なくそい

つらの練習に付き合う事になって、俺は個別にギター担当の人にギターの手解きをしてやったっけ。まあ筋は悪くなかった記憶はあるが、名前が確か……

俺は期待の眼差しをこちら向けている彼女に向かって、

「月島……まりも？」

すると彼女は突如ズルツと転び掛けるも体制を立て直したかと思つたら、両手でカウンターをバンツ!!と叩きつけて、

「そんな緑色の球体をした天然記念物みたいな名前な訳ないでしょう!! どうせならまりあとか、まりかとか、せめてもっと名前らしい名前で間違つてよ!!」

と、まさに——さすがにそこまではいれないが——鬼のような形相で怒鳴ってきた。てゆうか名前の呼び間違いを要求してくるかな普通。

「まりなよ、月島 まりな。忘れちゃたの？」

「なんだよ。一文字違うだけじゃねえか」

「そういう問題じゃないでしょう! って、君も知り合いつて分かった途端、タメ口になつてるし……」

月島は一息吐くと、俺の顔を再び覗いてきた。

「そういえば君、眼鏡なんて掛けてなかったわよね。視力落ちたの？」

「いや、伊達だよ。……あまり悪目立ちしたくないからな」

「ああ……うん、そっか、そうだよね」

月島は寂しげな表情を浮かべる。やっぱりこいつも知っているんだ。俺のバンドがどうなったのか。

を……

「そういうお前もバンドはどうしたんだ？」

「……うん、実はね、私達のバンドも色々あって、ずいぶん前に解散しちゃったんだ……」

「……そうか……」

聞いちゃいけないことを聞いてしまったと、俺は目を伏せる。

「あつてもね！その後も皆とは仲良くやっているよ。私みたいにライブハウスに務めている人もいるし……」

「……だったらお前らは、俺達よりも十分ましだよ」

俺は視線を窓の方に向ける。月島も俺の言った事を察してか、顔を俯うつむかせた。

——お互いに沈黙が流れる。が、それを切ってきたのは月島だった。

「ゴメンね、久しぶりの再開なのに変な空気にさせて」

そう言つて彼女は苦し紛れの笑みを浮かべる。俺も月島に気を使わせてしまったことを申し訳なく思った。

「いや、いいんだ。今さらどうすることもできないし……」

「……うん」

そう言うとき月島は切り替えたかのように、俯いた顔を上げ、パンツと両手を叩いた。

「さあー暗い話しはここまでにして、今からこのライブハウスについて説明するね。改めて、私はこのLIVEHOUSE CIRCLEのスタッフ、月島 まりなです。これからよろしくね！響君！」

「いや、俺はまだ完全にここで働くとは決めてない……」

「よ・ろ・し・く・ね！響君！」

「……はい、よろしく……」

清々しい笑顔向けてくる月島を見て、俺は、どうやら自分には選択肢がないことを悟った。

「それじゃあまず、このライブハウスについて説明させて貰うね。まず、ここLIVEHOUSE CIRCLEは元々、オーナーがこのあたりで活動しているガールズバンドを応援するために作られたものなんだ」

「……またガールズバンドか……」

「何か言った？」

「いや、別に」

「そう？じゃ話しを戻すね。そして私達の仕事はこのカウンターでお客様への対応、各スタジオの機材の点検、店内の清掃が主な仕事だね」
まあそんなものか、俺もライブハウスには通ったことはあるから大体分かる。

「そしてここからが大事。このライブハウスでは定期的にライブイベントを開催しているの。その時の仕事内容も沢山あるの。まずはそのイベントを記したポスターやチケットの制作、その販売、次にイベントに参加を希望するバンドの受付、そして出演する各バンドのセットリストをまとめて…」

「本番前に照明を合わせるために各バンドと打ち合わせ、当日は入場する客への対応、裏方で出演者達のサポート、ライブ中の照明合わせ、その後場合によっては裏方で打ち上げの用意、最後にライブハウスの清掃。つと言った所か」

月島の説明を遮って俺が後を代弁する。

「おお、さすが。経験者は語るね」

「ライブハウスのスタッフなんてしたことないがな」

「それだけ理解しているなら後はその時に説明するだけでよさそうだね。よし！響君。君を今日からCIRCLEのアルバイトとして正式に採用します！」

「…は？もう採用するのか？もつとこう…面接とか、履歴書の拝見とかないのか？」

まあ履歴書つっても高卒ぐらいしか書くことないし、持ってきてすらいらないがな。

「いや真面目な話し、うちって開店してまだ一年も経ってなくて、従業員も私を含めて片手ぐらいしか人数がいらないだよねえ。オーナーも経営を私達に任せてここに来ることがほとんどなくて、正直猫の手も借りたい状況なんだよ。君はバンドの経験もあるし、音楽や楽器の機材にも詳しいから、正直私にとってはこれ以上ない助っ人だよ」

「…よくストライキとかしなかったな。聞く限りブラックの匂いがするんだが」

「まあ私も好きでやっているからね。それに仕事も忙しいってだけで別にパワハラとか受けている訳じゃないし」

「ならいいが」

「よし、じゃあ次はこのライブハウスを案内するね。ついて来て」

俺は月島の後に続き数十分ほどでCIRCLEの内部全てを回った。

「まあ設備的にも構造的にも悪くないライブハウスだな」

「もう、もつと他に言い方はないの？」

店内を回って再びカウンターに戻った俺の率直な感想に月島は顔をしかめる。

「そういえば、まだ客の1人も来てないな」

俺がここに来てそろそろ30分経とうとしている。

「まだ開店したばかりだからね。でもそろそろこの時間に予約していた子達が来るはずなんだけど……」

月島がそう言い掛けると、正面の自動ドアが左右に開いて、

「いっちばくくくん!!!」

なんか騒がしい奴が入って来た。

第2話　く期待の超新星く

「いっちばくくくん!!!」

そう言つてライブハウスに走つて元氣に入店して来たのは、背中にギターケースを背負つた少女だった。背丈からして高校生だろう。前髪に赤い星形の髪飾りをした茶色の長すぎず短すぎずの髪からなにやら猫耳のようなものが生えているが俺はあえて考えないようにした。そして彼女は入つて来たのに続いてまた1人……

「私2ばくくくん」

と言つて入つて来たのは、最初に入つて来た子よりも背は高く、髪も腰にまで届くほど長い黒髪の女の子だった。彼女も背中にギターケースを背負っている。

二人が揃つて手に膝をついて息を切らしていると、

「もー、二人とも速すぎー」

と言つて、息を切らしながら入つてくる今日で三人目の客。亜麻色のショートポニーを洒落たりボンのような物で結んでいる女の子だ。背丈は最初に入つて来た子と2番目に入つて来た子の間ぐらいか。この子は肩にバックをからつているだけだった。

そしてその手続き、

「はあ……や、やっと追い付いた……」

と言つて、とても走り疲れた表情で四人目が入つて来た。黒髪のショートヘアで、身長はこの四人の中で一番低い。この子は背中にケースを背負っている。

「えつと……皆大丈夫？」

さすがの月島も心配になって、息を整えている四人組に声を掛けた。

「あつ、まりなさん。おはようございますー!」

最初に入つて来た猫耳(?)の子はもう回復したようで、月島に元氣よく挨拶をする。

「う、うん。おはよう香澄ちゃん。あれ?1人いないような……」

「ああ、有咲ならもうすぐ来ると思っていますよ」

月島の疑問に3番目に入ったショートポニーの子が苦笑いしながら答える。すると、2番目に入って来た黒髪ロングの子が、

「あつ、有咲来たよ」

と言つて外を指差した。すると、向こうから、よろよろと大きなケースを背負いながら女の子が息を切らして走って来る。その顔は今にも死にそうだ。

「有咲——!!ガンバレ——!!」

という猫耳(?)の応援に、走っている女の子はキツそうに声を絞り出して「う、うるせえ——!!」と返してきた。すると今度は黒髪ロングの子が、

「有咲くくくもう少しだよくくく」

という声援にも、「だからうるせえよ!!」と返事した。なんだかよく分からないが、俺はあの子がとても不憫でならなかった。

そして数十秒後、彼女は無事、CIRCLEへ辿り着いた。

入り口で四つん這いになってゼーゼーと息を切らしているのは、金髪のツインテールの女の子だった。身長はこの5人組の中では2番目に背が低い。だが何より気になるのは彼女が背中に背負っている長方形をしたほぼ彼女と等身大に近い黒い荷物だ。見た感じ重たそうだが、一体何が入っているのかとても気になる。

「有咲、大丈夫?」

「有咲ちゃん……」

猫耳(?)の子と黒髪ショートの子がしゃがみ込んで、四つん這いの子に声を掛ける。すると彼女は、猫耳(?)の子を睨み付けて、「だ、大丈夫な……わけ……ねえだろ。……大体こんな……暑い時に……走ってくお前らの方が……おかしいだろ。倒れたら……どうす

んだ」

と、大変ごもつともなことを言った。金髪の子の言葉に猫耳(?)の子は、

「で、でも、走って行かないと、予約の時間に間に合わないと思って……」

「誰のせいでそうなったと思ってんだよ!!それもこれも全部お前が寝坊したせいだろうが!!」

「えへへ〜それほどでも〜」

「誉めてねえ!!」

このやり取りから考えるに、この猫耳(?)の子が寝坊したことで予約の時間に遅れそうになったので、全員ダッシュしてここまで来る羽目になったようだ。もしそうならこの猫耳(?)の子が完全に悪いが、こいつ、反省の色ゼロだな。

「まあまあ有咲落ち着いて。はい」

とシヨートポニーの子がなだめながら店内の自販機で買ったと思われるポ〇リを金髪の子に渡す。

「お、おう。ありがとう」

金髪の子は素直にお礼を言って〇カリを受け取り、そのままがぶ飲みした。年頃の女の子にしてはいささか品がないが、状況が状況なため目を瞑っておこう。

「ぶはー生き返ったー。サンキュー沙綾。後でお金は払うから」

「いいよこれくらい。さあ、早くスタジオに入ろう。走って来たおかげで早く着いたとはいえ、予約の時間オーバーしちやっっていることに変わりないんだからね」

「あつー!そうだった!早く入らないと練習する時間なくなっちゃおうよ!」

「だからそれはお前のせいだろ!」

この金髪、絶対振り回わされて苦労するタイプだ。

「全く、騒がしい奴らだな」

「でもそれがあの子達の良いところでもあるんだよ」

俺のため息交じりに吐いた独り言にいつの間にかカウンターに

戻っていた月島が答える。すると、

「まりなさん、スタジオの貸し出しお願いします」

ギターケースを背負った黒髪ロングの子がカウンターにやって来た。

「はい。じゃあこの鍵と同じ番号の部屋を使ってください。今回は特別に今から貸し出しにするけど、次からはこんな事が無いようにしてくださいね」

「はい、ありがとうございます」

月島のサービスに黒髪ロングの子はお礼を言ってスタジオの鍵を受け取った。

すると彼女はさつきからずっと空気だった俺のことをじっと見つめてきた。しかも、

「じ——」

と言った変な効果音付きで。なんだこいつ？

「おたえ——早く早く!!」

「あつ、うん。今行くー」

猫耳(?)の子の声で我に返ったのか、彼女はさつと視線を俺から反らし、声の主達の元へ駆けていった。

何なんだあいつ？

「全く、香澄のせいで酷い目にあった」

金髪の子は両腕をぶら下げて歩きながら言う。彼女の言葉に猫耳(?)の子は笑いながら、

「ゴメン、ゴメン。次からは気をつけるから」

「私はあと何回その言葉を聞けばいいんだよ」

そう言って金髪の子はため息を吐く。

「でも、まりなさんのお陰で時間いっぱい使えるから良かったよね」

「沙綾の言うとおりだよ有咲、結果オーライだよ」

「それはお前が言っつていい台詞じゃねえだろ！」

ショートポニーの子の言葉に猫耳(?)の子が便乗するが金髪の子にツッコまれる。

そんな3人の会話の中、黒髪ロングの子が顎に手を当てながら歩く。黒髪ショートの子がそれに気づき、声を掛ける。

「?.....おたえちゃん。どうかしたの?さっきからずっと考え込んでるみたいだけど.....」

「えっ、あつううん何でもないよ」

「そ、そう?」

黒髪ショートの子の声に気づき、ロングの子は心配いらないうに取り繕う。しかし、彼女は頭の中で浮かべている「疑問」を振り払うことが出来ずにいた。

「そういうばさ、まりなさんの隣にいたお兄さん、見ない顔だったよね」

「ああ確かに。新人のスタッフさんかな?」

「別にそんな考え込む事でもねえだろ」

猫耳(?)の子の話しにショートポニーの子が便乗するが金髪の子が興味無いのか、話しを切る。

そんなこんなの中に5人はスタジオの入り口の前に着いた。髪をリボンで結ぶショートポニーの子が、「おたえ、鍵」と、スタジオの鍵を持つ黒髪ロングの子に鍵を開けるように促すが.....

「うくん」

「おたえちゃん?」

彼女はそれを無視する所か、入り口を素通りし、そのまま歩き進む。

そして、現在の彼女の脳内には、

(やつぱりあのお兄さん、どこかで見たことがある気がする.....)

という事しか頭なかった。顔は斜め下を向いていたため、彼女は前が見えていなかった。そのため.....

「...たえ」「...前」

(ん?)

「おたえ前、前!!」

「えっ?.....わっ!!」

彼女が反応した時にはもう遅く、ゴッ!!と鈍い音が廊下に響いた。黒髪ロングの子の額が廊下の突き当たりの壁にぶつかつたのだ。彼女は額を両手で押さえながら2、3歩下がるとそのまましゃがみ込んだ。

「いたたた」

「おたえ大丈夫!?!」

「おまえ何やってんだよ!スタジオ素通りするし、何度呼び掛けても返事しないし」

「やっぱりおたえちゃん変だよ」

「おたえどうしたの?」

メンバーはすぐに駆けつけ、猫耳(?)の子から、金髪の子へ、黒髪ショートの子からショートポニーの子へと、心配そうに言葉を投げ掛けてくる。

「.....」

しばらくすると、ロングの子は何も言わずにすっと立ち上がった。その表情は前髪に隠れてうまく読み取れない。

「おたえ?」

ショートポニーの子が再度心配そうに声を掛ける。が、ロングの子は聞こえているのかいないのか、ただ一言、

「思い出した」

「「「えっ?」」」

彼女の思いがけない一言に4人は呆気に取られた。

「思い出した!あの人は.....!」

彼女はそう言いながら振り返り、廊下の出入口を目指して走り出した。

「ちよま!?!おたえどこ行くんだよ!」

「おたえ~~~~!!」

金髪と猫耳(?)の子が叫ぶ頃には、彼女は出入口を通過してい

た。

「あいつらもバンドをやってるのか？」

「うん、そうだよ。Pippin Partyっていうガールズバンドでね、最近結成したバンドなんだ」

「……ガールズバンドねえ……」

同時刻、俺と月島は先ほどの5人組の事について話し合っていた。彼女達はスタジオに向かったが、どうやら金髪の子はまだ猫耳(?)の子を許していないらしく、ここから彼女の文句が聞こえてくる。

「うちをご鼻肩してくれているバンドの一組でね。よくこのライブにも出演してくれるんだ」

「……因みに腕前の方はどうなんだ？」

「そりゃあ、君達のバンドに比べたらまだまだだけど、私はあの子達の演奏は好きだよ。あの子達のライブを聞いていると、とても楽しくなるんだよね」

「ふーん」

月島の台詞に俺は興味ない反応を示す。

あつ、今廊下の方で金髪の子が怒鳴ってる声が聞こえた。

「このライブってああいいうバンドが出演するんだろ？結構人来るのか？」

「うん、チケットも毎回ほぼ完売するし、ライブをやる度にお客さんもバンドの人達も盛り上がってくれるから私もとてもやり甲斐を感じるんだ」

「……ふん」

下らない。そんな紛い物のバンドの一体何処がいいのか、俺にはさっぱりだ。

百聞は一見に如かず。

昨日祖母との電話の後、俺はガールズバンドについて調べて見た。いくつか動画やSNSを視てみた結果、有名な曲をカバーしたものはかりで新鮮味も感じなければ、完璧に演奏しきれてもいかなかった。時々出てきたオリジナルの曲もクオリティの低い歌詞や演奏に俺はこれ以上視る価値はないと判断した。

観客もその場のノリと勢いで勝手に盛り上がっているだけだ。

確かに、音楽をやる理由は人それぞれだ。だがどんな理由があるにせよ、例え遊びにせよ趣味にせよ、確固たる意志を持ち、音楽を本気で取り組くみ向き合わなければその演奏に価値など無いと俺は思っている。

俺が視たガールズバンドの音楽はどうもそういうものを感じなかった。

だから俺はガールズバンドを……軽い意志で音楽をやっている奴らを認めない。

これはかつて音楽を生き甲斐としてきたとある男の廃れた信条であり、こだわ拘りであり、ほこ誇りだ。

「どうしたの？きつきからそんな怖い顔をして」

「悪かったな、元からこんなに顔なんだよ」

「……もし気のせいだったらゴメンだけど、響君、君きみなんだかイライラしてない？」

「……別に」

「そう？だったらゴメンね。なんだかそんな風に見えたから」

「……数ヶ月ぶりに顔を合わせたお前に俺の何が分かるってんだよ」

「うん、そうだよ。ゴメン……」

お互いに沈黙が流れる。月島は俺に苦笑いを浮かべて謝ってきた。俺もさすがに気が立って言い過ぎたと思ひ謝罪しようとしたが……

ゴツ!!

というまるで人が壁に激突したかの様な鈍い音が廊下から聞こえてきた。

「どうかした?」

月島も俺の反応に気付いて話しかけてきた。

「今、誰かぶつかった音がした」

更に廊下から「大丈夫!」などという声が聞こえてくる。

「えっ!?ぶつかったって、何処で?」

「向こうの廊下からだ。さっきの奴らの誰かが壁にぶつかったんだろ
う」

そう言って俺は顎で廊下の方を示す。

「大変!怪我してはいないか見に行かないと!」

月島はそう言って廊下に向かって駆け出そうとした。

「待て、月島」

俺は彼女を呼び止めた。

「どうして?もし怪我でもしていたら……」

「そのまま走ったら怪我人が増えるからだ。それに、お前の心配は杞憂みたいだぞ」

「えっ!」

月島がそう叫ぶと、廊下の角からギターケースを背負った黒髪ロングの子が走って出てきた。その額は赤く腫れている。おそらくこいつが壁にぶつかったんだろう。だがあの様子からして大丈夫そうだ。もし月島があのまま走っていたら、月島とあの子がぶつかって余計に被害が出ていただろう。俺があの子の走っている足音が聞こえていて良かった。

だが、俺にとつての問題はそこじゃない。俺は廊下での彼女達の会話がほとんど聞こえていた。つまり……

黒髪の子は辺りを見渡し、カウンターに立って俺を見つけると、月島の呼び掛けを無視し俺の元に駆けていった。

その時、

「おたえ?」「おたえちゃん?」

残りの4人が廊下から出て来た。しかし、黒髪ロングの子は、それにも反応せず俺に言葉を投げ掛けて来た。俺は彼女何て言ってくるか大体分かりきっていた。

さてどう答えようか……

「お兄さん、もしかして『NOVA』の響さんですか!？」